

学生の学びあいが育む成長エネルギー

～学習者の自立を支援する学生支援の構築にむけて～

(立命館大学

学生部学生オフィス衣笠

課長補佐)

松井 かおり

一 はじめに

立命館大学（以下、本学）では、学生支援に学生が参加・参画するしくみを様々な運営している（表1）。これは、大学を構成する学生、教職員がそれぞれの役割と立場から学生の学習、学生生活、自治活動等を支援するという伝統の中で育まれた文化であるといつてよい。学生が参加・参画することによって、教員は授業の枠を超えて学習・学生生活への支援を行い、個々の学生の支援が中心であった各学部事務室や各窓口、直接的には学生支援を業務としてこ

表1 本学における多様な学生支援

内容	支援者（名称）
学習支援	エデュケーション・サポーター
	学生FDスタッフ
	ティーチング・アシスタント
	ボランティアスタッフ
新入生支援	オリター・エンター制度
キャリア支援	ブレースメント・リーダー
	ジュニア・アドバイザー
国際化関連	留学アドバイザー
	留学生支援スタッフ（TISA）、パディ
学生生活関連	ボランティアスタッフ
図書館	ライブラリースタッフ
情報システム	レインボウスタッフ
国際平和ミュージアム	学生ボランティア
広報	学生広報スタッフ

なかった部課の職員が教員と連携して、学生の活動支援や教育・研修を行うというしくみに広がっている。

本稿では、新入生支援活動（オリター・エンター活動）^①を取り上げ、本学における学生による学生の自立支援の取り組みと、学生支援全体の今後の課題について述べる。

二 新入生支援活動（オリター活動）の取組み

新入生支援活動（以下オリター活動とする）の歴史は、一九七〇年代に学生自治組織が設立したオリター活動に始まる。一九九一年度に行われた全学協議会^②において、大学での導入期にあたる一回生小集団クラスにおける学習のあり方について議論が行われた。その際、大学は、大学教育の成立の鍵となる一回生期に良質な学習集団形成を行う必要があるとの認識から、それまで自治組織のみで運営され、学生部が支援にあたってきたオリター活動を学部教授会と連携した教育的支援として位置づけ、今日に至っている。

オリターは、新入生が大学生活を円滑に送るためのサポートを行う上回生の集団であり、毎年度、学部毎に募集される約八〇〇名（新入生の一割）が、一年間（学部によっては一セメスター）活動を行っている（図1）。

オリターに応募する学生は、大学生活を生き生きと送る先輩の姿にあこがれ、先輩のように成長したい、もっと人間関係の幅を広げて成長したいという動機など、自己成長への期待が動機となっている。学生間の相互作用であるピア・ラーニングが学生のなかに可視化されて実践されている事例として意義がある。

オリターの活動は、「学習支援」「学生生活支援」「自治活動支援」の三つで構成されている（表2）。近年、大学の学生支援において、新入生が円滑に大学での学習に適應できるよう初年次教育が重視されており、オリター活動の質や関わった学生の成長は、初年次教育の充実にとって重要である。

こうした状況のもとで、オリター活動の特徴は、学習への支援の強まりである。学習とは、正課授業という枠組みにとどまらない、学習目的、学習動機、学習習慣など学生

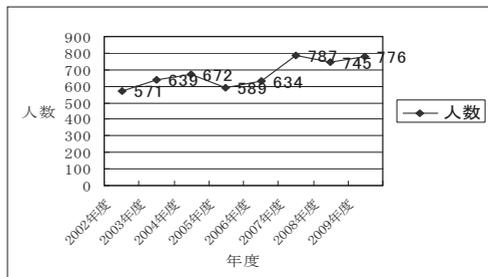


図1 オリター・エンター登録者数推移

特集・学生の自立支援

の姿勢、学習の基礎となる倫理観や価値観など学生の精神的成長をも含む。ここでは、二つの取組みを紹介したい。

① 文社系学部における履修相談

文社系学部では、オリターが自主的に履修相談会を実施し、開催中はどこも盛況である。履修は、学習の基本重要事項であるため、学部教授会・事務室が事前に研修等を実施して学生の活動を支援している。大学での学習をスムーズにスタートさせたいと考える新入生にとって、身近に質問、相談できる上回生はありがたい存在である。新入生の六〇%が自宅外通学者である本学では、慣れない一人暮らしの不安も含めて、その都度、不安が解消さ

表2 オリター活動の主な取組み

区分	内容
オリエンテーション	クラス懇談会
学習支援	1 回生小集団クラス(基礎演習・研究入門)授業の学習支援 履修相談 サブゼミアワー運営 1 回生クラス合宿運営
学生生活支援	クラス茶話会 仲間づくり支援 個々の学生の相談
自治活動支援	クラス役員選出、自立的クラス運営支援
全体	新入生歓迎祭典準備 1 回生クラスリーダーズキャンプ運営 1 回生向け冊子(パンフレット)作成

れることにより、学生生活への期待が膨らみ、安心して学生生活に臨むことになる。また、相談にあたった上回生は、改めて所属学部での学習の目的やカリキュラム内容、全学的な教育プログラムについて知ることとなり、自分自身ができるように学びを形成してきたのか、という自己の学習への振り返りにもつながっている。

② 理工学部におけるサブゼミナールアワーの運営(表3)

本学では、一回生小集団や三・四回生演習を自主的・主体的に学ぶために、サブゼミナールアワーが設けられている。理工学部は、導入期教育として専門の基礎となる授業を行っているため、オリターは、学部教授会の支援を受けてつつ、自主的に一五回のサブゼミナールアワーを運営している。大学での学びについての先輩や教員の講演、理工学部教学では直接的にはカリキュラムには反映できていないデイバートやディスカッションなどの体験、プレゼンテーションスキル講座、テスト前の勉強会など、新入生のニーズにあわせて実施されている。単位化されているものではなく、**「強制力」**は働かないため、運営は苦勞も多い。しかし、専門学習の比重が高く、全てをカリキュラムに組み込むことができない理工学部において、大学での学びをバ

ランスよく行ううえでの工夫の一つとして評価でき、他の学部にも普遍化できる取組みである。オリター活動を行った学生が提出した活動報告書によれば、一回生から受けた相談内容の主なものは以下(図2)のとおりである。

その他、自分の性格や人間関係の悩み、恋愛相談なども相談内容として多くあげられており、自立しつつある過程の学生にとって、先輩への相談は自分で解決していくための契機となっていると考えられる。

表3 理工学部におけるサブゼミナールアワー実施モデル

回	内容
第1回	新入生関係祭典準備
第2回	欠席学生支援
第3回	大学での学びについて(オリターからのプレゼンテーション)
第4回	1回生クラスリーダーシップキャンプ事前準備、今後の学生生活設計(マインドマップ作成)
第5回	1回生クラスリーダーシップキャンプ報告活動
第6回	自治活動について
第7回	学生生活、教学要望とりまとめ
第8回	コミュニケーション力アップの取組み
第9回	グループワーク活動
第10回	学科での学びについて(教員の講演)
第11回	グループワーク活動
第12回	1回生クラスリーダー企画
第13回	テスト対策勉強会
第14回	テスト対策勉強会

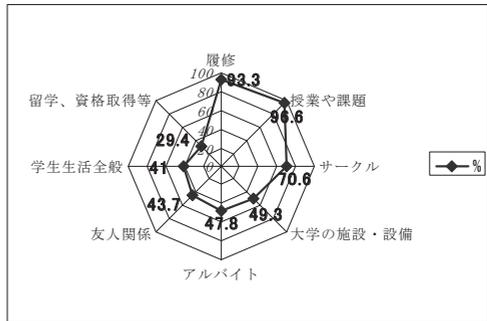


図2 1回生から受けた質問 (全学平均)

重要なことは、オリター活動において行われている「学習支援」「学生生活支援」「自治活動支援」がそれぞればらばらに存在しているのではないという点である。先述のオリター活動報告書から、オリター活動を経験した学生がどのような点で成長しているかをみてみると、①新入生、オリター仲間、教職員と関わることで、多様な価値観を知り、自己を問い直す契機となっている、②粘り強く対話し相互理解する力、何かを決断する力がついている、③一回生のモデルとしての役割の自覚、④学生間、教職員との相互作用のなかで学生自身の学習への姿勢が変化している、のが特徴である。オリター活動の意義は、学生自身が学びの姿勢を転換させる循環機能を作り出しているということであり、自立した学習者を育成する上で重要な機能である。

三 オリターへの教育・研修と教職員の関わり

オリター教育・研修は、オリターが独自に実施するもの
 の他、学部、学生部、その他関連部課が連携し、オリター
 のニーズにあわせて取り組んでいる(表4)。

こうした取組みを通して、学生は、改めて自分の学びの
 環境を確認し、困ったときにどのようにすれば円滑な解決
 が図れるかなど、オリター自身が学びのコミュニティとし
 ての大学を見直す契機となっている。教職員にとっては、
 教育・研修、オリター活動への支援を通して、学びのコミ
 ュニティの一員として学生を迎え、ともに学びあう場をつ
 くる機会となっている。

一方、教員や専門家が常時支援していない大学において、
 人と一歩踏み込んだ対話や交流の経験が浅い学生にとつ
 て、新入生との対話やオリター仲間とのミーティングなど
 実際の活動はストレスを伴うことも多い。オリター団は、
 三回生が事務局を担うが、オリターの多くは二回生である。
 今後は、オリターの事務局を担う学生への支援(リーダー
 研修など)が必要となっている。

表4 オリター研修の内容

区分	内容	関連部課
学習	大学での学び	各学部
	所属学部での学習について	各学部
	履修相談の知識	各学部
	学習リテラシー	各学部・学生部・教育開発支援課
学生生活	大学の支援制度	学生部
	学内の施設設備	学生部・図書館・その他関連部課
	トラブル対処法	学生部
	健康について	学生部・保健センター
	飲酒の危険	学生部・保健センター
	薬物への対応	学生部・保健センター
	こころの健康	学生部・保健センター・サポートルーム
	障害者支援	学生部・障害学生支援室
自治	学友会のしくみ(自治活動について)	学生部
全体	多様な新入生への理解	学生部・教学部
スキル	コミュニケーション力	学生部(サポートルーム)
	プレゼンテーション力	学生部(サポートルーム)
	課題発見・解決力	学生部(サポートルーム)
意識	オリター・エンターとしての自覚と役割	学生部
	大学におけるオリター・エンター活動の位置づけ	学生部

四 今後の学生支援の課題

オリター活動を中心に本学での学生の自立を支援する学生支援の取組みを述べてきたが、冒頭で紹介したように、学生が参加・参画するしくみは他にも多くあり、自立した学習者を創ることを目指した立命館らしい取組みといえるだろう。

しかし、本学が、教学の理念や建学の精神、教育研究目標に基づいて、学生の成長を実現していく教育、大学環境を充実させていくためには、さらにパラダイムシフトが必要である。それは、学生は、個としての学習者であると同時に大学という学びのコミュニティにおける主体的参加者であるという視点から、学習者としての学生をとらえなおすことである。自立した学習者の育成は、正課授業に円滑に取り組み、学士課程において必要とされる一般的・専門的知識を身につけるということにとどまらず、学生の価値観、精神面、態度、姿勢など情緒面での成長をも含み込む視点が求められる。同時に、学習者は、学びのコミュニティにおいて学習に参加する責任を持ち、構成員が相互に支援するという他者との水平的な関係において成長する存在

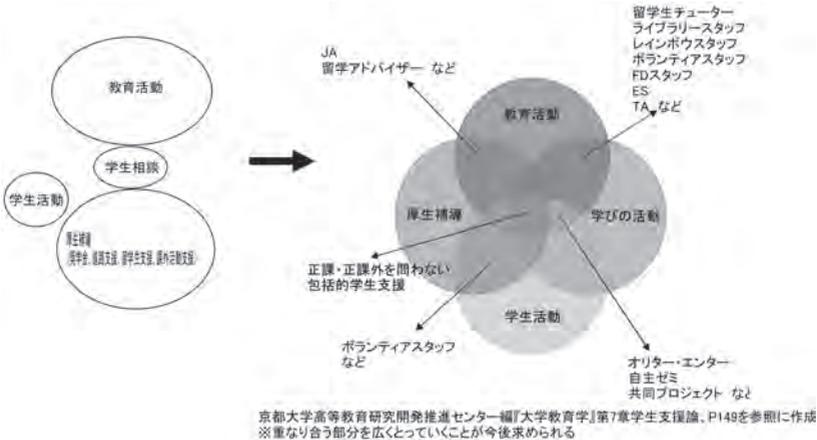


図3

特集・学生の自立支援

でもあるという二つの視点から行われる必要がある。

特に、近年、大学生の不正薬物使用、社会性を欠いた行動など、学生の中で高度な専門知識を身につけることと倫理性、社会性をもった人間として成長していくこととの間に大きなアンバランスが生じている。生涯にわたって学び続けることができ、社会の不正や不正に對して当事者意識を持って向き合うことができる自立した学習者の育成が大学に求められている。

正課と正課外の両輪によって学生支援を進めるという従来厚生補導の概念を、学習者を中心に置き換えたとき、学生支援の在り方、支援体制、施設整備の在り方は正課と正課外の支援を統合した包括的な学習への支援へと変わらなければならぬ。学生相互の水平的活動や学びのコミュニティにおける相互の学びあいを促進するために必要な組織の考え方、教職員に求められる知識・技能は変わってくる。FD/S Dを超えたEducational Developmentが必要なきがきている。

〈注釈〉

1. オリタター・エンターは、学部毎で呼称が異なる。本稿ではオリタターで統一して表記する。

2. 本学では、教学、学生生活、学園の将来像などについて構成員である学生、大学院生、教職員と協議するための機関（全学協議会）を持っている。